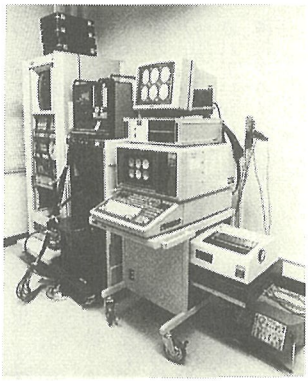
遠藤汪吉大学名誉教授に聞く

同志社の特質

聞き手　河野仁昭



同志社との因縁

――先生は京都大学のご出身で（文学部哲学科で心理学を専攻し、昭和八年三月卒業）、第二次大戦後に同志社大学へ来られたようにうかがっているのですが、それまでに同志社となにか関係がおありになったとか……。

遠藤　特別の関係といったものはなかったですが、なにか因縁のようなものはあった気がします。

――と申しますと。

遠藤　大正四年ごろですが、東京大学の助手をしていた父が北海道大学の教授になったものだから、一家が札幌へ移ったんですよ。だから私は（明治三十八年九月二十九日生れ）、小学校から札幌で、中学は札幌の第二中学校へ入学しました。その学校の校長先生は「のう」という一字の変わった名前の方で……。

――能力の「能」ですか。

遠藤　そうです、能校長。その校長先生は大変な人格者だったですが、どういういきさつとか関係があったかは知りませんが、あるとき講演に同志社総長の海老名（弾正）先生を呼んで来られましてね。

――遠藤先生が何年生のときですか。

遠藤　正確には覚えていませんが、二年生ごろだったように思う。

――海老名が同志社の総長に就任されるのは大正九年四月ですから、それ以後でしょうね。

遠藤　そうですか。その講演の題は「大我と小我」というのでした。話の内容は忘れてしまったですが、特にキリスト教の話というのではなかった。その記憶はありますね。ただ、中学生だった私は、その「大我と小我」という題が非常に印象ぶかくて、そのときの海老名総長とその言葉をいまだに覚えています。これが私が同志社の方に出会った最初です。

――そのころは今とちがって、札幌と京都はずいぶん遠いし情報も少ないですわね。その京都に、そういう総長がいる同志社という学校があると……。

遠藤　そうはいっても、北海道と同志社はむかしからわりあいに関係が深いから。

――それはそうです、新島以来で。

遠藤　まァ、そんなことがあって、それから私の父が肺結核になって、須磨か明石で療養することになったんですが、仙台で病気が重くなって死んだのです。私たちはそれから京都へ来て、大学も京都で学びまして。

大学を卒業して神戸に就職したのですが、戦時中に家内が病気で亡くなりましてね、子供を二人残して。勤めもあるし私一人では子供の面倒もみてやれないということもあって今の家内と再婚したのですが、家内は同志社女学校の出身でしてね。

――ご結婚の前にそのことをご存知だったんですか。

遠藤　同志社出かどうかはあんまり関心がなかった(笑)。結婚してのちに兵庫県から京都へ移って、しばらく家内の実家へ寄宿したんですよ。

遠藤汪吉名誉教授

――たしか、左京区の吉田の方でしたね。

遠藤　そうです。それからいろいろ聞いてわかったんですが、家内の三姉妹はみな同志社女学校出なんですね。

そんなことを思うと、同志社となにか因縁のようなものがあったのではないかという気がしましてね。

同志社へ来るまで

――いま、神戸に就職なさったといわれましたが。

遠藤　兵庫県の児童研究所です、研究かたがた子供の相談とか。医学と心理学とに分れていて、子供の教育上の相談などをやっていました。

――カウンセリングのようなこと……。

遠藤　まア、そういったことも。ところが戦争が激しくなって子供たちが疎開して行ったものだから、開店休業の状態になってしまいまして、研究所はしばらく閉鎖すると県庁からいってきたのです。そして、「あなたは淡路支庁へ行って下さい」といわれまして。

――それはどこにあったんですか。

遠藤　淡路島です。戦争がひどくなると、交通機関その他がうまくいかなくなって、淡路島は孤立する恐れがあるというので、県の支庁を置いたのです。

――先生は研究職だったんでしょう。

遠藤　研究員なんですが、県庁の職員であることには変わりないので、知事の命令があれば仕方がないから、厚生課長ということで嫌々ながら行きました。(笑)

――子供の相談も厚生福祉だから、関係がないことはないですね。(笑)

遠藤　課長といっても、私は役人のことはなにも知らないので(笑)、課員がみんなやってくれました。

そこで終戦になって、厚生課の仕事の後始末をしてから辞表を出したわけです。すると、ちょうどそのころ、関西大学で心理学を教える人が要るといっていたものだから、関西大学へ行ったのです。

――関大にも心理学科のようなものがあったんですか。

遠藤　なかったのです。文学部哲学科に私は籍を置きましてね。心理学には実験設備が

兵庫県立児童研究所時代の
遠藤名誉教授

必要なので、そういうものを作ってほしいと度々頼んだのですが、いっこうに作ってくれないし、心理学専攻を設ける予定もなかった。

——それで同志社大学へ……。

遠藤　当時は同志社の心理学にも人がいなかったのです。しかし、旧図書館（現・啓明館）の一階に小さいけれども実験室はありましてね。

同志社大学の心理学

——関西大学から同志社大学へお移りになったのは何年ごろですか。

遠藤　昭和二十四年の四月からです。

——すると、新制大学になってから。

遠藤　そうでした。

——同志社大学の心理学専攻はまだ独立していなくて、たしか文学部文化学科教育学及心理学専攻でしたね、教育学と一緒だった（昭和四十二年に教育学専攻と分離）。

遠藤　同志社は元良勇次郎、中島力造、松本亦太郎といった人材を出していて、心理学の伝統は、同志社英学校が新島によってつくられたころに溯ることができるんです。この『同志社大学心理学研究室六十年史』の中に、竹中（正夫）さんが詳しく述べて下さっていますが。

——拝読しました。

遠藤　それで、心理学専攻ができたのは、大学令による同志社大学が開校してまもなくです。

——昭和二年に哲学科が設置されて、その中に哲学専攻、倫理学及教育学専攻、そして心理学専攻の三つの専攻がおかれています。

遠藤　ですからもともと独立した専攻だったんです。私にとってはそれが魅力で。

——戦争中に組織変更がありましたけれども。

遠藤　それはありました。

——過去の歴史が戦後の組織改革にも影響をもたらせている感じがしますね。

ところで、いま、同志社大学の心理学にも教授スタッフがいなかったというお話でしたが、全くいらっしゃらなかったわけではないでしょう。

遠藤　本宮（弥兵衛）先生（宗教心理学）が教えておられたのですが、神学部へ移られたので、京都大学の（佐藤幸治）先生が客員教授として、しばらく心理学のお世話をして下さっていました。私がきたときは、松山（義則）君が専任講師、ちょっと遅れて野辺地（正之）君が助手になって。それから後に京都大学の助教授になった苧阪という人（苧阪良二—教養学部助教授）がいました。

——それだけですか。（笑）

遠藤　それくらいでした（笑）。そこへ私が入って。その後に小嶋（外弘）君とか。小嶋君を招聘するために、私と松山君と二人で、鹿児島まで行きました。鹿児島におられたのでね。

——実験室が旧図書館にあったということでしたが。

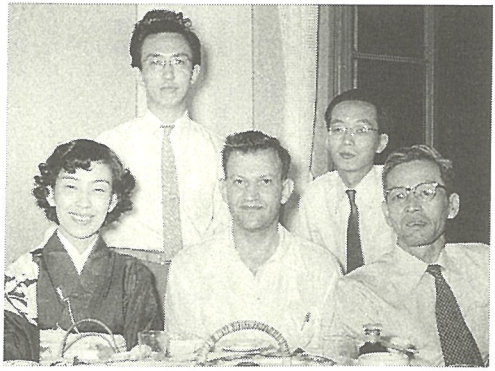
遠藤　一階の入って右手の部屋でしてね、二部屋ぐらいつないでいたのだったか。

――研究室はなかったんですか。

遠藤　ありました、致遠館の中だったかどうか、あのあたりでした。

心理学と実験設備

――先ほど来、しばしば「実験室」とか「実験設備」といったことをお聞きしたのですが、わたしなど、心理学といったら大学の一般教育の授業を聞いたくらいで、全くの門外漢ですから、哲学の一分野かな、というくらいの認識しかないんです。だから、なんで実験設備が必要なのかと。



ボーディン教授を囲んで左から、浜治世、野辺地正之、ボーディン、松山義則、遠藤の諸氏(1957年)(ミシガン大学)

遠藤　それはもっともなことだといえばいえます。私が同志社へきてからいちばん苦労したのもそのことです。心理学専攻は文学部の中にありますから、文学部の中にあっても理工学部とおなじように実験をやらんことにはいけない科学なんだということが、大学の中でなかなか理解してもらえない。だから設備を充実するための予算をなかなかつけてもらえなかった。

――じゃァ、皆さんわたし程度の認識しかなかったわけだ(笑)。元来は哲学の領域であったように思うのですが、いつごろからですか、自然科学的な実験をともなう学問になるのは。精神科学というのか。元良勇次郎はイェール大学で実験心理学をやったようですが。

遠藤　二十世紀の始めです、哲学から分離して実験をともなう学問になったのは。

――じゃァもう一世紀たっていますね。

遠藤　松山君は若いときイェール大学へ留学して、学習行動学を研究して帰ったんだが、「先生、心理学は悩みを解決する学問ではないですね」と私にいったことがありました。

――いま総長をされている松山先生ですか。

遠藤　そうです、若い時に。

――それまでもっていたイメージとは違う学問だということに気づかれたのでしょうか。

遠藤　そういうこともあったでしょうし。

――悩みももっておられて……。

遠藤　とにかく、学内でなかなか理解がえられないものですから、学生から実験実習費を納めてもらうことにしてはどうだろうかと……。

――工学部と同じですね。

遠藤　それもなかなか認めてもらえなくて提案してかなり年月がたってから、やっとそういう扱いをしてもらえるようになりました。設備は高くつきますので、学校の方で予算をつけていただけるようになりましてからも、それだけではもちろん足りませんからね。

――他の専攻や学科とちがうから、やむをえませんね。でもまァ、現在では、心理学に

は実験がつきものだということがわかってきましたから……。学問に対するイメージが変わりましたねえ。

遠藤　大下（角一）学長のときであったと思いますが、実験動物の飼育や、実験実習の指導で必要だから、そのための助手を一人雇ってほしいと申請したんですよ。

――それは教員系列の助手ではないんですか。

遠藤　そうじゃなくて、いわゆる実験助手です。だから「なんでそんなものがいるのか」と、これもなかなかわかっていただけなかった。（笑）

――工学部じゃないですからね。

遠藤　そうです、そういう助手が必要なのは工学部ということに決まっていたから。

――その時代から思うとよくなりましたねえ、先生のご努力が実を結んだといえると思います。

遠藤　そういうことでもないけど、時代の趨勢ということもありましょうし。田辺校地の心理学実験実習室、ああいうものをつくっていただけて、本当に結構だと思っています。

兼任行政職の問題

――ところで、先生は文学部長とか学生部長とか、何度も役職におつきになられて。

遠藤　そうですね、文学部長を三回、それから学生部長をさせられました。

――学生部長も二度ですか、たしか新しい学生会館をつくるとき先生が学生部長で。

遠藤　学生部長は一回です、三年の任期で長かったですが。私は上野（直蔵）先生にいろいろお世話になったものだから、上野先生が大学長の間は、頼まれたら仕方がないと思って……。駒井（四郎）君が学生課長でした。おっしゃるように学生会館を建てることになって、管理運営の問題で何度も学生たちと交渉しまして、あのときはひどいめにあいました。

――管理運営の話がついていないからと、学生が別館の工事を妨害したことがあったりしましたね。それから、ちょうどそのころ寮の寮費問題などが起こった。

遠藤　此春寮が最初ごたごたしはじめて。

――神学寮だったですね、最初は。それで一般学生の入寮を認めろと、神学部の教授会と団交のようなことをよくやっていたのを覚えています。

遠藤　そうでした。それからだんだん学生部の問題にもなって。とにかく会館問題は私が終始責任者でしたから、だいぶやられました。（笑）

――先生は大学紛争のころ、学長代行をなさいましたね。

遠藤　星名（秦）学長が健康上の理由で辞任されたので……。あの学長代行というのは選挙でなるんじゃないんです、学部長の中の最年長者がなるということになっていて、それで私がさせられた。選挙で任命されるわけではないから、他の学部長とか、そのほかの部長といわば対等の立場なんですね、だから学長としての権限なんてものはほとんどないわけです。

――学長の権限は与えられていないんですか。じゃァやりにくいですね、大学長の責任においてどうする、ということが出来ないのでは。

遠藤　バリケードなどを早く取り払って、授業が出来るようにしたいという気持はみん

なにあったと思います。しかし、解除の方法などの問題になると、部長会や大学評議会の中にいろんな意見があって、一致できない。そんなことを繰り返しているうちに、私はとうとう病気になって、それで学長代行を辞任したんです。

――そうでしたか。先生は学長代行をなさっておられたころ、学友会の代表などとよく団交をなさいましたですわね。あれも大変だったろうと思います。

遠藤　団交要求というものが学生部を通して出てきて、団交に応じなければどうするとか、いろいろ書いてあるわけです。なんとか話し合いで解決したいし、また、その責任がありますからね。田辺校地への移転問題とか、いろいろいうわけです。

――そんな問題を学長代行にいくらいってもどうしようもないんですけどね。

遠藤　田辺の土地は学内の事情があって、同志社が放っておいたでしょう。だから、同志社が譲ってもらった近鉄でも、田辺町でも問題になっていた。教職員住宅に一部を分譲するといったことはしていましたけれども。それと、女子大だけはなんとか体育施設を作って……。学生たちは会うたびにどうするんだということを言いました。いつもスローガンに掲げていましたからね。

――「大同志社構想粉砕！」とか「田辺移転反対！」とか。田辺校地の問題は、田辺町とか近鉄との責任ある窓口は学校法人ですから、大学長代行の立場はいっそう苦しいですね、直接どうするということができる問題ではないわけでしょう。

遠藤　ああいう大学の役職というのは、そういうことだけでなしに、いろいろ問題を感じますね。みな兼務なんです。任期が終ったら兼職が解かれて研究に専念するというかたちになるんですが、行政職としてなすべきことはろくすっぽわからないうちに一年か二年の任期が終わる、しかもその間は研究が留守になる。実に中途半端なんです。

――本務は学部に所属する教員だし、兼職は一定の期間を切ってのことですから、どうしてもそうなりがちでしょうね。

遠藤　学部長は選挙で選ばれます。選挙で選ばれたら断わりにくい。だから一年か二年のことだし辛抱してやろかと(笑)。それで管理職の仕事がどういうものやらわからないうちに任期が終わる。そして研究室へ帰って教員としての仕事する。私はああいうことは不思議というか、あまりよくないと思うのです。国立大学などは大学長を辞めると、そのまま定年になったようなかたちで大学を退職していくでしょう。

――管理職は行政職として学部からはずしますから。

遠藤　同志社は特別じゃないかと思うんですよ、学長を辞めて学部へかえるというのは。中途半端な制度だと思うのです。兼職というのは、その任期が終わるころには定年を迎えるというかたちの方がいいのではないかと思う。

私など三回も文学部長をやって、学生部長をやって、七年か八年研究室を留守にするという妙なかたちになってしまいました。

――研究者としては問題が残りますね。行政職としても中途半端だとすると、こちらの方も問題が残るでしょうし。

遠藤　だからなんとかいい制度に改めるべきじゃないかと、つくづく思いますね。

――それにしても、遠藤先生にしても松山先生にしても、あの団交の席で、学生たちに

根気よく応答されるので、本当に驚きました。精神的にタフでいらっしゃるのではないかと、失礼ながら思うのです。心理学をやっておられるとそうなれるのでしょうか。

遠藤　心理学をやっていると自分の感情を客体化できるから、一度や二度ならもつということはあるでしょうね。

文学部教育学・心理学専攻の教員たち。左から松山義則、志賀英雄、吉川哲太郎、遠藤汪吉、野辺地正之の諸氏

同志社のよさ

――昭和四十七年に先生は同志社大学をお辞めになったようですから、二十何年間か在職されて。

遠藤　二十三年間つとめたわけです。同志社を退職して行った追手門学園を含めますと、私の研究生活は五十余年ですから、同志社にいたのはその半分の年数ということになります。しかし、その年月の間に、同志社が私の人生にとっていちばん大きな印象を残しました。

――ちょうど働き盛りであった、ということとも関係がありますか。

遠藤　そうしたこととか、研究とか役職とかいったことを抜きにして、人生上大きなプラスになったと思うのは、同志社で生活して、人間同士がお互いに、利害とか打算、損得を抜きにした人間としての信頼関係によって結ばれている、そういうものが同志社にはある、ということです。

――それは同志社にとって大変ありがたいお言葉です。

遠藤　いま振り返ってみてそう思うのです。何か得をする、あるいは損をする、そういったことではなしに、ほとんど純粋なかたちの信頼関係といったものですなァ、そういうものがあったということを感じています。そして、それが私にとっては非常に大きな人生上のプラスになったというか、影響を受けたということをね。

――そうですか、そういうよさというのは、よそで勤めたことがないせいか、在職中のせいか、わたしにはよくわかりませんが。

遠藤　心理学の研究のなかにもありますが、全く純粋な信頼関係というのは、赤ん坊と母親との間にだけできるのです。

――それはわかる気がします。

遠藤　赤ん坊と母親の間にだけあるものと似たものを、私は同志社で感じた。同志社の特色というものは、フォーマルにはいろんなことがいえるでしょうが、そこにいてはわからないんだけれども、長年の間に知らず知らずしみこんだもの、そういうものが徐徐にわかってくるのです。年をとると、人間の信頼関係というものを考え直してみることが多いものですからね。

――それはキリスト教主義による同志社の歴史がつくり出したものでしょうか。

遠藤　私は新島先生に関することとか、同志社の歴史については、余り知らないんです。最近はぽつぽつ読んでみていますけれども、同志社に在職中は、役職の関係で創立者の墓参に参加したときとか、いろんな式典で新島先生についての話を聞くとか、その程度でした。だから歴史とか新島先生と、あるいはキリスト教と関係があるかどうか、はっきりしたことはいえません。しかし、そういう雰囲気を伝統的にもっていたのはおそらく確かでしょう。そこに校風の一つがあるといってよいかどうか、ちょっと説明しにくいんだが。

――学生たちはどうですか、そういうものをお感じになられたことがありますか。

遠藤　学生は他の私立大学とそう大きなちがいはありませんね。

――四年間在学して、社会人になると、同志社の卒業生のタイプは他大学の卒業生とちょっとちがっているところがあるという話を聞くことがありますが。そのことと、いま先生がいわれたこととは性格がちがうでしょうけれども。

遠藤　地位とか名誉とかに関係なく、社会のなかで演じている役割を通じて、そういう印象を与えるところがあるわけで。だから同志社には校風がないようでいて、なんか気になるものがあるんですね。

関西学院の今田学長が、私どもによくいうんですよ、「あなたとこはいい、設立者の精神、新島精神というものがある大学だから」とね。

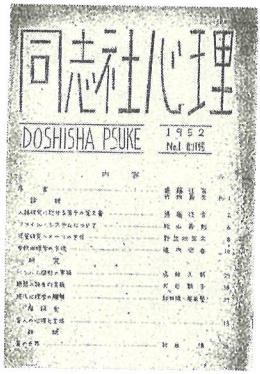
――関学にもあるでしょうに、ランバス先生。メソジストの……。

遠藤　私もそう思うんですけどね、今田先生の話では、新島先生のように学生たちの心にいつまでも残るようなことを説いて聞かせた人がいないんだそうです。そういって嘆いていました。そうはいっても、同志社でも在学中にはあんまり気づかないものでね。私はそういったものはかえって女学校の方にあったんじゃないかという気がします。

――新島は女学校で教えることはなかったようです。しかし、女学校では礼拝をきちんと守っていますし、伝統を大事にしてきましたから。共学の中学、高校もそうではありますけれども。

遠藤　礼拝とか式典とか創立者墓参とか、ああしたことはやはりきちんとやった方がいいようですね。そのときは何といって感じることがなくても、あとでわかってくることがあるから。

リ・ユニオンなんて形式的なことのようだが、ああいう会合を毎年もつということは、出席するかどうかに関係なしに、一人一人の卒業生にとって、それなりに意味があることです。



「同志社心理」創刊号

宗教性ということ

――式典とか礼拝とかは、確かにあとから何か感じるものを残すだろうと思いますね。たんなる形式的なものじゃあるまいという気

がするんです。

遠藤　私は同志社のキリスト教精神についてそれを感じたことがあるんです。私はクリスチャンではなくて、真言宗なんです。家がそうだものだから。それで学生時代には真言宗に興味をもっていて、その研究会にも出たりしましてね、ことに親鸞について非常に興味があって……。ところが同志社の教員になって、しかも役職についたりしますと、いや応なしにキリスト教の行事にも参加することになるわけです。

――式典などすべてキリスト教の式でおこなわれますから。

遠藤　だから、それなりにキリスト教のことも勉強しました。また、この家に住むようになりましてからは、もともとここは、この近くのカルメル会という修道院の茶畑だったところへ建て売り住宅を建てたのを買った家で、その教会の礼拝にもよく行くんです。

――カトリックですか。

遠藤　そうです。ただし、本部はローマじゃなくてミラノにある。礼拝に行っておりましたら神父さんから、「洗礼を受けませんか」といわれたことがあるんです。しかし、私は「洗礼を受けるつもりはありません。ただ、こうして礼拝に出て、神父さんの説教を聞くのを楽しみにはしているけれども、カトリックに変わる気持ちはありません」と答えた。そしたら神父さんも、「いや、それはそれで結構です」といわれて、今も礼拝に顔を出していますけれども。

――真言宗もカトリックも、結局のところは宗教あるいは心の問題だという……。

遠藤　私、考えたんですが、仏教であろうと、仏教のなかの何宗であろうと、キリスト教であろうと、また、そのなかのプロテスタントであろうとカトリックであろうと、そういう一宗一派を越えた宗教性というものは、人間にはだれにでもあると思うんですね。

その宗教性というものが、若いときにはなかなかつかみにくい。だから日本ではたとえば先祖崇拝ですとか、そういった独特のかたちでもって宗教というものを家で継いできたんだと思いますけれども、先祖崇拝だけで宗教心が成り立つとは思えないんです。

――「宗教心とは何か」ということになるでしょうが。

遠藤　宗教心とは何か、となると定義はむずかしいけれども、すべての人間が最終的に直面するのは宗教性だと、私は考えるようになりました。それは自分自身の救いという問題とかかわるものです。年をとった自分自身の救いというのは、死の問題と対決したときいや応なしに要求される。特にどの宗教によって救われるということではなくて、たしかに既存の宗教によって手掛りになるものは得やすいでしょうが、宗教性を持っている人は、持っていない人よりも死に対して落ちついた対応ができる、そういう気がするのです。

――わかるように思います。死に直面した自分を、死の問題から超越させる精神的要因というか、なにかそういったものとして。

遠藤　私、思いますのに、先ほどいった利害や打算を越えた純粋に近い人間関係というものの背景に、その宗教性があるんじゃないかとね。

――はァ、なるほど。同志社ではそういうものが知らずしらずの間に培われていると。

遠藤　同志社には宗教的な行事がいろいろありますね、学生たちはそれにいやいやながら出席している。「聖書」にだって余り関心を持たない、しかし授業だから「聖書」や宗教

の話を聞くわけです。そうしたことが、意識しないで影響をもたらせていく。お互いのなかに残っていく。そういうものがあるんじゃないかという気がするのです。

――大変興味ぶかいお話です。それで、先ほどいわれた死と宗教性の問題で、ふと思い出すのは新島襄ですね。

明治二十一年の七月ですが、新島は医科大学のベルツほか二、三人の医師の合診の結果を、八重夫人を通じて知らされるんです。心臓が極めて悪い、だからいつ絶命するかわからないので、大事なことはそれとなしに聞いておき、重だった人にはその旨を知らせておきなさいといわれたと。

遠藤　そうですか、それは知らなかったですね。なにかに書いてありますか。

――日記です。かなり詳しく書いてあるんですが、その中に、自分は全治の見込みはないことを知っていたし、「いつでも天父の招に応じて天堂に進む覚悟はなしたれば」別に驚きもしない。けれども後に残す老母と妻のことを思うと哀れで涙がこぼれる、そういう意味のことを書いているんです。私はこれを読んだとき、死に直面してこんなに平静でいられるということが非常な驚きでした。ショックといった方がいいか。

彼はそれから医師の勧めで、伊香保で二カ月ほど療養するんですが、その間の日記にも、死の不安とか、近づいている死によるかげりのようなものは見えないんです。それ以後、亡くなるまでそうなんです。

遠藤　初めてうかがうことですが、新島先生の場合は、おそらくキリスト教とその宗教性が一体となっていたのだろうと思いますね。信仰の一つのかたちとしてのキリスト教ではなくて、死と直面したときに全部任せっきりになれるもの、そういうものをお持ちだったのでしょう、そう思われますね。

――はァ、なるほど。

遠藤　心理学の同窓会の時にも言っていることですが、「人生百十五歳論」ということを言っていましてね、人間が肉体的にぎりぎりまで生きるとすると、まァ、精神力によって肉体の劣えをカバーするということもありますが、その限界は百十五歳だと。百十五歳まで生きると自然死の状態で死ねるわけです。

――そうですか、百十五歳！。

遠藤　そこまで生きると、死が自然に近づいてくる。死を素直に受け入れられる時期がくるというわけです。

私はいま八十六歳で、そういう状態になれるのはまだまだ先のことですが、また実際にはそこまで生きられるかどうかわかりませんけれども。私はこれからの自分の気持ちを記録しておいて、死ぬとき息子に渡してやろうかなと思っているんです。

――書いておられるんですか。

遠藤　はい、ただ書いておくだけのことですよ、発表するとかいう目的ではなくて。

――いいことではありませんか。先生ご自身のお気持ちを客体化されるという意味でも。

遠藤　いいことかどうかは別としてね。とにかく、死とか、宗教とか、信仰といったものは、既存の特定の宗教と結びつけていわれがちだけれども、そうした信仰を越えたところに宗教性というものはあると、私はいまそう考えています。

――大変有益な、感銘ぶかいお話をありがとうございました。

（一九九一年七月二十九日、遠藤汪吉名誉教授宅にて収録）